

温故知新のまちづくり 姫路市・姫路城周辺



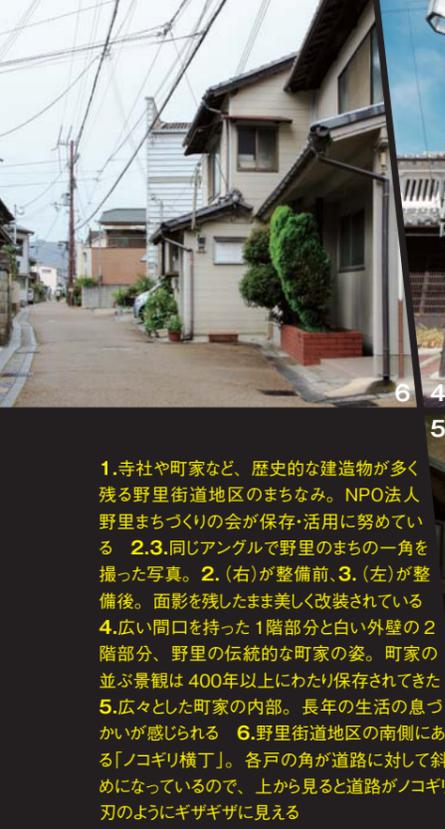
日本有数の観光都市・姫路市では、市中心部にある姫路城と共にまちづくりが進められてきた。城への眺望や歴史的まちなみ保存を重視したまちづくりは、約400年前に池田輝政が計画した螺旋式縄張りがベースとなっている。

五層の大天守を中心とし、天守が複雑に組み合わさった連立式天守群がなす美しい造形

都市計画の原点は 築城時の螺旋式縄張り

JR姫路駅を出てすぐ、北側に真っ直ぐ伸びる大手前通りの先に見えるのは、姫山に立つ世界遺産姫路城。関ヶ原の合戦後、徳川家康の娘婿・池田輝政が1601年から築城に着手、8年をかけて完成させた。

築城後初の天守群解体復原修理となった「昭和の大修理」(1956～1964年)から半世紀ほどを経て、2009年から5年かけて保存修理工事が行われていた。今年3月に工事を終えた大天守は、長らく覆われていた素屋根がすべて取り払われ、新しく塗り替えられた外壁と屋根の目地漆喰が一層白さを引き立て、まさに白鷺のようである。姫路のまちづくりはこの姫路城、そして輝政と共にあった。



1. 寺社や町家など、歴史的な建造物が多く残る野里街道地区のまちなみ。NPO法人野里まちづくりの会が保存・活用に努めている。2.3.同じアングルで野里のまちの一角を撮った写真。2.(右)が整備前、3.(左)が整備後。面影を残したまま美しく改装されている。4.広い間口を持った1階部分と白い外壁の2階部分、野里の伝統的な町家の姿。町家の並ぶ景観は400年以上にわたり保存されてきた。5.広々とした町家の内部。長年の生活の息づかいが感じられる。6.野里街道地区の南側にある「ノコギリ横丁」。各戸の角が道路に対して斜めになっているので、上から見ると道路がノコギリ刃のようにギザギザに見える。

城の東側は、寺町筋と呼ばれるように、寺院が集中している。これは、戦のときに前線基地にするという意図があったからだ。その北側には、城周辺を代表する歴史的なまちなみが広がっている。大天守の北東に位置する野里地区は、但馬地方への陸路の起点であり古代から交通の要路だった「野里街道」の面影を残すエリア。街道沿いは輝政の町割以前から、職人や商店の

城下町づくりの 心意気を感じながら散策

駅南へ流れる外堀川は、運河になるはずだった。輝政の別称を冠して三左衛門堀とも呼ばれ、舟運計画の名残がうかがえる。計画が頓挫したため、流路だけを残した未完の運河だ。

周辺には数多くの歴史文化遺産が点在する。観光で姫路を訪れると、つい姫路城の城郭だけに目を奪われがちになるが、周辺のまちをそぞろ歩くと、輝政が目指した「城下町構想」をかいま見ることができる。

螺旋状に内曲輪、中曲輪、外曲輪が配置された螺旋式縄張り(設計)は珍しく、江戸城と姫路城のみとされている。



輝政が姫路城下と瀬戸内海を結ぼうと構想し、未完成に終わった幻の運河・三左衛門堀



保存修理工事中の姫路城



螺旋式縄張り町割図
左回り三重の螺旋状の縄張り(設計)は珍しく、江戸城と姫路城のみとされている。



姫路城周辺地図



4. 姫路駅前の眺望デッキ・キャッスルビュー。姫路城にも使われている素材(鉄や地元産のスキなど)を活用。駅から真直ぐ伸びる大手前通りの先に城郭が優美に構える景観 5. キャッスルビューの外観。鉄と木の素材感で姫路城の門をイメージしている 6. 駅の北側に整備されたキャッスルガーデン。駅前にくつろぎの場を提供するだけでなく、新しい駅ビルと既存の地下街をつなぐ役割も果たしている。人が行き来しやすい構造になっており、今一番のにぎわいスポット

1. 手柄山中央公園のシンボル、ロックガーデンとスリラー塔。塔は手柄山のふもとからでもよく見え、存在感たっぷり。内部は迷路のようなつくりで、約50年の歴史を感じさせる 2. 手柄山交流ステーション内に展示されている、姫路大博覧会のジオラマ。博覧会は姫路城の復元工事(昭和の大修理)完成を記念して計画された 3. 写真上の建物は、ロサンゼルス空港の管制塔を模して作られた回転展望台。床が15分で一回転し、お茶を飲みながら市内を一望できるカフェスペースを併設している。写真下部は、沈床式庭園を意味するサンクガーデン。2900㎡の巨大な花壇では年2回植え替えを行って、一年中花を鑑賞することができる



いくことだろう。

りは、未来の姫路に継承されて

をやめない温故知新のまちづく

歴史を活用しながら、進化

た景観に感嘆すら覚える。

でき、道と城が最高にマッチし

の遮蔽物もなく姫路城を一望

る。眺望デッキ「キャッスルビュー」からは、何

ら思い思いのひとときを過ごす人でにぎわっている。眺望デッキ「キャッスルビュー」からは、何



「キャッスルガーデン」が広がり、城を眺めなが

配した姫路大博覧会は、姫路市の戦後20年の

まちづくりの集大成ともいえる、戦後最大規模

の地方博となった。レトロな展望台や遊園地が

「昭和」を漂わせている。

博覧会を機に建設された姫路モノレールが当

時そのままに展示されており、博覧会のジオラ

マとともに往時の姿を伝えていた。モノレール

は1974年に運休となったが、まちなかの

随所に線路跡を見ることができ、これも昭和レ

トロを味わえる隠れた人気スポットなのだ。

駅前北側に広がる、 世界文化遺産の玄関口

400年前から始まった城下町構想、昭和

の戦後復興からの都市整備を経て、姫路市は

今なおさらなるまちづくりに燃えている。生ま

れ変わったのは決して姫路城大天守だけではな

い。姫路駅北側には、開放的なくつろぎの広場

「キャッスルガーデン」が広がり、城を眺めなが

ら思い思いのひとときを過ごす人でにぎわっている。眺望デッキ「キャッスルビュー」からは、何

の遮蔽物もなく姫路城を一望

る。眺望デッキ「キャッスルビュー」からは、何

戦後のまちづくりと 昭和が漂うモノレール跡

野里には、変わった道の形や家の並び方をし

た場所がある。家を道に対して斜めに建て、ノ

コギリの刃状に斜向した家並みは通称「ノコギリ

横丁」と呼ばれ、「一説には敵から隠れたり(い

わゆる「武者隠し」、進行を妨害したり

する役割があったとされる。また、わざ

と道路面からずらして道が付けられている

ために生じた「あてまげ」という小スペースは、敵

を挟み撃ちしたり死角をつくることを目的とし

た姫路城の守りの一つだ。こうした歴史的な部

分も、行政と住民が一体となって保たれている。

まちなかに立つ、柱だけになったモノレール線路

手柄山中央公園から見下ろした姫路市街。写真右下はモノレール線路跡も見える



展示されたモノレール。わずか8年間の運行だったが、約200万人の乗客を運んだ



歴史を活用し、城道が一体となつたまちをなみを目指します。



同 姫路市都市地点整備本部 姫路駅周辺整備室 室長 森 典さん
姫路市役所 都市局 市街地整備部 部長 藤井雅人さん

姫路市は、終戦の年二回にわたって空襲を受け、市街地大半が焼土と化した中でその姿を留めた「姫路城」を核に、戦後復興計画を立案しました。

姫路城と姫路駅を結ぶ大手前通りは、復興土地区画整理事業におけるシンボルロードとして優れた景観を創出し、日本の道百選にも選ばれています。

城周辺のまちづくりでは、歴史と道との調和をテーマに、城との眺望景観や城下町に埋もれた歴史資産を生かしたまちなみ整備を目指してきました。

市民活動は非常に活発で、計画は常に市民と行政の協働が進めます。野里地区もNPO法人「野里まちづくりの会」が中心になって活動しています。

駅前には、世界文化遺産の玄関口にふさわしい空間にしようと、大手前通りの改修、広場の整備、人の行き来を中心としたトランジットモール化など、城への眺望を軸に整備し、姫路ならではの景観ができてきました。今後も歴史を生かした取り組みを続けます。姫路の事例が、世界的観光資産を持つほかの都市にも刺激になればと思います。